

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10289

研究課題名（和文）精神分野における地域包括ケアに従事する看護師の対話を重視した教育の方法と検証

研究課題名（英文）Methods and validation of dialogue-based education for nurses engaged in comprehensive community care in the psychiatric field.

研究代表者

未安 民生（SUEYASU, TAMIO）

佛教大学・保健医療技術学部・教授

研究者番号：70276872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は精神科医療を利用している原因を看護師と患者の対話によって明らかにして解決への見通しをもつことである。この研究においてはコミュニケーションの基本である対話を、リフレクティングプロセスという「話すことと聞くことを一定の条件の下でくり返しながら互いの気がかりを伝えあう」方法で試みる。両者の気がかりを率直に伝えあい重ね合わせることが継続的な話し合いを成立させていく。この実践方法を看護師の教育訓練に組み込むことで看護師の対応方法の変化が得られることを確認し、これからの実践に活かしていけることの証明を得る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、保健医療福祉分野においては疾患治療重視から患者であっても生活者として焦点化する地域包括ケアに転換しつつある。その展開のためには看護師も患者、家族、他職種などと「人対人」の対話の成立を可能にする臨床能力が必要である。さらに教育訓練方法を開発し、その有効性が検証されなくてはならない。そのためフィンランドにおいて誕生し、臨床的な評価を得ているリフレクティングプロセスを臨床的に試行した。その結果、看護師の対話に変化が生まれただけでなく、自身の振り返りを通して自己の成長にも寄与していたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to identify the underlying causes of psychiatric care utilization and to propose solutions through nurse-patient dialogue. The study employs a reflective process, a basic method of communication, in which talking and listening are repeated under specific conditions. The process of open communication and the intermingling of concerns on both sides facilitates ongoing discussion. By incorporating this practice into the education and training of nurses, we were able to confirm the potential for change in the way nurses respond to each other and obtain evidence that can be used in future practice.

研究分野：精神看護学

キーワード：対話 リフレクティング・プロセス 内的会話 参加意識 看護師 地域包括ケア 集団のダイナミクス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

わが国では、人々の尊厳の保持と自立生活の支援を目的として、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。しかし、精神科に入院している「受入条件が整えば退院可能」な長期入院患者の地域移行支援・定着支援については、制度としては進捗しているものの在院患者総数は減少していない。そのため、患者と家族をどのように「地域」で支えるのかという視点による対象者別のきめ細かい入院・退院調整と地域支援者との調整技術、早期介入のための対人援助技術が必要であると考えた。

本研究で用いる対人援助技術のための方法は、フィンランドのケロプダス病院の現任教育で用いられているリフレクティング・プロセスである。精神科医療を必要とするときにときに緊迫した場面においてもそこに集う人たちが生き生きとした会話が成り立つような場をつくるための実践的考え方であり、介入方法である。近年では同国の精神科医療システムであるオープンダイアログとともにわが国にも紹介されている。その中でリフレクティング・プロセスは、ときに行き詰った人々が新たに見通しを得るための対話の場を生み出すための方法である。対話のすすめ方として「きく」と「はなす」ことを切り離してその両者を語り合わせていく。丁寧だが、自発的に対話に参加するための手続きと時間を要する。現在、わが国をはじめ諸外国の精神科医療において関心を集めている。ケロプダス病院と地域機関が連携している実践において、統合失調症の入院日数が19日間短縮し、薬物も含む通常の治療を受けた統合失調症患者群との比較において、服薬を必要とした患者全体の35%、2年間の予後調査で82%において症状の再発がないか、再発率は24%に抑えられているという実績を残している。わが国にそのような地域を限定した精神科医療の介入後の予後調査の先例は少ない。一方、フィンランドと医療システムは大きく異なるがわが国の精神科医療も地域包括的ケアへと転換を図っている。精神科訪問看護の事業所も従事者も急激に増加している。

そのため看護師もこれまでの入院ケアを基本とした病院業務から地域精神科看護への転換を図り、患者の生活の場を理解したケアに転換していく必要がある。中でも看護師の患者ケアにおける対応方法は、旧来の観察、アセスメント、計画、介入、評価のサイクルのままである。そのため看護師のリフレクティング・プロセスが精神科治療に寄与しているフィンランドのリフレクティング・プロセスの応用と活用が可能ではないかと考えた。だがフィンランドの精神科医療の実践はこの10年ほどの間に学会、書籍、専門誌で語られるようになってはきているがリフレクティング・プロセスを臨床において看護師を対象とした教育プログラムとして実施した報告はなく、教育方法の確立が急がれる現在において価値がある。研究者らはケロプダス病院における研修を受講し、研修プログラムの研修指導者へのインタビューなどを通して研修システムについて分析を行ってきている。そこでわが国の精神科看護師を対象とした教育プログラムを策定、実施し検証する。

2. 研究の目的

本研究は、移行期にある精神科分野の地域包括ケアに従事しようとする看護師に対して、看護師と患者、看護師と医療従事者間の対話を重視した教育方法を開発し、検証することである。

本研究では現在わが国の看護師の現任教育としては取り組まれていない対話を重視した継続的な教育プログラムを実施する。その方法についてはリフレクティング・プロセスを活用し、参加者や専門家とともに方法の妥当性と有効性を参加者個人の成長とともに振り返ることで参加者の臨床応用力が高まることを期待する。

そのため、

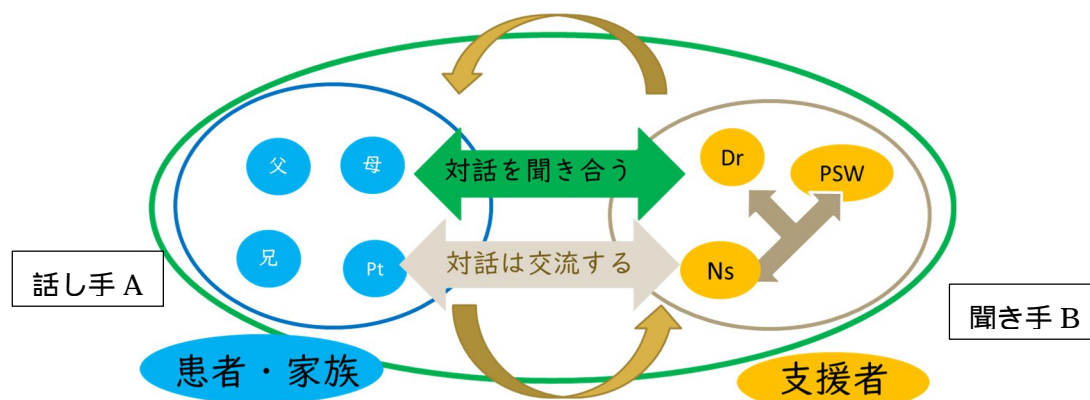
教育プログラムに参加した結果について、参加者全体と研究者、参加者同士の相互理解の視点で明らかにし、獲得できたこと、獲得が難しいと感じたことについて言語化し共有する。

対話を重視したリフレクティング・プロセス*を用いたプログラムによる教育方法と効果について明らかにする。

*リフレクティング・プロセスとは、精神科治療分野では「開かれた対話」の技法として知られている。他者と話す外的な会話と、聞くことによって得られる内なる自己との会話を丁寧に重ねあわせていくことが重視されている。わが国における治療法としては精神科臨床全体に定着している方法とは言えないが、心理臨床分野においては2000年前後から学会のテーマなどとしても方法論だけでなく評価的な視点での討議がなされている。本格的な邦文文献の初出は『ナラティブからコミュニケーションへ リフレクティング・プロセスの実践』（矢原隆行・田代 順 編著 / 弘文堂 2008）であり家族療法や心理療法、学校保健臨床での活動の集約がなされた。現在では家族研究・家族療法分野を中心に実践的研究報告も行われている。看護分野では2013年から雑誌にも掲載が見られ始めたが、実践的活用を目指した研修は依然として家族研究・家族療法学会や日本臨床心理学会などが中心であり、精神科看護分野において2016年から職能団体によって研修が始められ、臨床応用の段階に入っている。

3. 研究の方法

- 1) 研究方法：参加型アクション・リサーチ
- 2) 研究対象者：民間精神科病院 100～400 床規模の民間病院 2 か所に勤務する看護師
- 3) 調査内容：教育プログラムへの参加と、参加者全員へのグループインタビュー（4 回目終了時と 8 回目終了時）本人の口述による対人関係上のコミュニケーションの変化、その変化の意味を研究者と共有した。
- 4) インタビュー内容：プログラムに参加して獲得できたこと・獲得を難しいと感じたこと 参加体験の振り返り（中間・最終）：「対話力」や「コミュニケーション力」について、日頃のケアから気づいたこと、自己のケアのスタイルに生じた影響や具体的な変化について
- 5) 分析方法：患者、家族、同僚、多職種との対話によってケアの方向性、見通しをもととするときに生じるズレやすれ違いなどに気づくとともに、これまでは意識してみなかった理由やそのことを意識化し口述、分析、比較してリフレクティング・プロセスの実施にあたっての困難性と効果的と思うことなどの成果を質的に分析した。
- 6) リフレクティング・プロセスは参加者の一部が一時的にそのグループの一員ではないような会話形式を展開する。そのため話し手 A（患者、家族、関係者等で相談チームと呼ぶ）とその聞き手 B（できるだけ複数でリフレクティング・チームと呼ぶ）とを分けることになるが、精神科医療における患者、家族と複数の治療者であるこの二組の対話によって対話が進む。
- 7) 対話の進行は、以下のように進める。
話し手 A が聞き手 B に今困っていることや、この場で気になっていることを聞き手 B に話す。
話し手 A は話したいことがほぼ話したと思えたら、話し手 A の話したことを、聞き手 B が質問したり感じたことを話す（リフレクティング・チームは複数名が話したいことを話した後、話し手 A が答えることが何度か繰り返される）。あるタイミングで聞き手 B のリーダーが話し手 A に断って、しばらく聞き手 B だけが対話をして、自分たちの考えを話し手 A に聞いてもらう。この話し合いをしているときには話し手 A はただ聞いている。話し手 A は、途中で聞き手 B の対話に質問したいことや意見が生じたら聞き手 B の発言が区切りを得るまでゆっくり待ちながらなぜ自分が今そのことを話したくなったのかを自分に問い（これを内的会話という）ながら、話すことに対しての準備性を高めることができる。
このようなやり取りをリフレクティング・トークと呼び、1 回の面接で 1 回～数回反復する。所用時間は約 60 分である。会話に一つの区切りや、間を空けての双方の対話を重ね合わせながら、問題の所在を互いの共有のできごととして受け止めていく。
最後は必ず、聞き手 B が話の継続を約束して終了する。



8) 教育プログラムの内容

1 回目	研究者による地域包括ケアシステムおよびリフレクティングについての講義
2 回目	再入院を繰り返す患者の事例のリフレクティング・プロセスの体験
3 回目	家族からの相談があった事例のリフレクティング・プロセスの体験
4 回目	長期入院（1年以上）している患者のリフレクティング・プロセスの体験 グループインタビュー前半プログラムの振り返り（実施に伴う困難感等）
5 回目～ 8 回目	4 回目終了時のグループインタビューで研究対象者が体験を振り返り必要と感じ 取り組んでみたい事例に基づいたリフレクティング・プロセスの体験

9) 研究継続のための調整

本研究は 2020 年を最終年度としていたが、COVID-19 の感染拡大に伴って研究対象施設での調査を一時中断した。中断が長期化することが想定されたため 2021 年度に入り、研究対象者の研究協力のための関心と参加の意欲を維持するための対話を on-line で行った。同年 12 月に対面調査を再開したが、再度、感染再拡大の状況になったために調査を再中断した。本研究は対象者

に研究目的と方法を告知し、任意で参加の意思を確認して選定している。しかし、中断は想定していなかったために研究対象者との間で相談して連絡調整係を設置した。これは本研究への参加の意義を再確認するための on-line の対話を円滑に行うためである。あくまでも研究への参加意欲を保つための補助的手段である。そのため研究内容に直接に抵触しない範囲で行うこととした。中断が2年を超えた現状となったが、参加態度やプログラムへの関心や参加意識の変化が研究に影響を及ぼさないようにするための調整として行った。

その結果、最終的には中断という障害があっても医療従事者間の対話を重視した教育への関心は継続していたと判断できた。研究対象施設においてはそれぞれの臨床状況を反映した場面に沿って対話の場面を採用することができた。これは研究計画に沿っている。研究対象者がサンプルの場面に刺激されて、自らの支援場面を提示し新たな展開を模索した。その結果、患者と看護師を取り巻く集団のダイナミクスやスタッフ間の意思の疎通についてこれまでと「差異」が生じたことが態度の変化として得られた。これには研究対象者の臨床経験年数やスタッフとの協働のあり方が影響していると考えられた。共通の反応としては新たな対話方法を習得しようとして、内的な会話という視点に意識を見出したと推測できた。研究の想定が試行的な対話によって成果として得られたものと考えられる。

4. 研究成果

1) 精神科病院におけるアクション・リサーチ

1 施設目の調査結果

研究参加者は13名(精神科経験年数6か月~29年)。研究協力者は臨床現場において「新たな会話が展開していく可能性を拓いていくように努めようとはした」ものの当初はスムーズに対話を行うことに困難を感じているように見うけられた。これは後半の対象施設においても同様の結果として見うけられた。これは現代日本の生活様式、家族関係、働き方などの基盤としての対人関係の様相が自由な対話の試行的な取り組みを阻害しているものと考えられた。感じたことをありのままに相手に伝える機会の少なさや医療職は絶対的な地位をときに1つの権威として築いてきている。もちろん尊敬される対象となるような役割も果たしてきているが、その一方で利用者に対して不必要な緊張を強いることもある。そのうえ強制的な入院制度のあるわが国の精神科医療システムにおいてその体制を維持、継続してきた医療職のための教育が行われてきた。看護の分野においては対人関係的な接近法としては、観察、アセスメント、計画、介入、評価の一連のサイクルとなって定着しており、そのシステムを維持する一部分として会話が用いられている。看護の役割として環境の整備は必須であり、患者が感情を表出できるような療養環境を整えるとともに安全で安心な病棟環境をつくるのが至上命題となっている。この中には物理的な安全性と精神的な安全性を最優先事項として取り組まれるようにプログラムされていて、入院患者に時には必要以上の制限をかけてしまっていることもある。グループインタビューに限らず、参加者からは個別ケアとして患者の望みを優先するのか、一時的に自由な行動は制限されるが患者とはできるだけ対等にコミュニケーションをしていけるようにしていこうとしているときの葛藤が語られていた。理念は学習することができるが、看護師がこれまでつづけてきた安全安心な体制を維持しながらいわば自由度を上げていくことの難しさが研究参加者から最も大きな内的な課題として語られた。

しかし、モデルとなるリフレクティング・プロセスを4回経験し、会話のもたらず見通しを得るための時間の共有や、そもそもこれまでとは異なる対話における「きく」と「はなす」ことの意義と語り合いが平行線ではなく折り合えることがあるということがリフレクティング・プロセスによって実感できたことは看護師たちに勇気を与えていたと思われた。これまでは観察される側であった患者や家族が、逆転して観察される側からのためらいながら聞き手チームである医療者を観察したことが自分たちからも表明できたこと、それがくり返しなされたことで、観察される側も観察し、観察する側も観察されうるといふ対話の成立はそれぞれの立場の自由度を増すことになった。より積極的に自分たちの発言を安心して述べることができるという変化をもたらした。もちろん計8回のリフレクティング・プロセスだけではすぐに慣れて療養環境をすぐに変えることはできないが、後半になるにつけ臨床場面の再現はよりリアルさを増した。

そのことをきっかけに振り返りの場面では事例として提出された場面のそれまでとは別の側面を語り出すような再体験が語られ始めることもあった。実際のケアの場面を振り返り始めた場面も見られた。対話とは、参加者が新しい方向を感じ考えるためのものであり「望ましい変化」を生み出すための方法である。研究参加者からは、「面談は患者、家族の話聞く場だが、ある程度方向性を定めてその方向に誘導してしまう」ことが日常的な臨床の現実である。これを変えていくことをめざせるのは画期的だが困難でもあると指摘がなされた。そのためにも教育システムが必要である。これまでの経験知を変容させるためリフレクティング・プロセスのトレーニング自体を安心した場で実施することが必要であり、臨床場面で効果的に取り組めるような活用方法を具体化する機会が必要であるという指摘がなされた。

2 施設目の調査結果

研究参加者：12名(研究開始時：16名、4名は異動などで辞退、経験年数11か月~28年)
この施設でのリフレクティング・プロセスは、日頃の自分たちの患者、家族との話している内

容や話し方が相手にどのような印象を与えているのか、に注目している人が多い印象であった。自分の話すことはまちがえていないのかなどと内省のプロセスを感じさせる発言が多くみられ、セッションの合間のやり取りの中でも他の参加者への確認も行われていた。これは、研究に参加するという目的意識によって、用意された事例である意味では想定内の展開であったとしても、目的とされている困難な課題だとしてもできるだけ対話によって見通しが得られるように自由に考え、普段から「柔軟に聞くこと」の態度が養われているのではないかと感じさせられた。研究自体の参加は強制されない、選択し自由に発言できる環境がすでにある程度は土台としてつくられていると感じさせる発言が見られた。そのため回を重ねると、ファシリテーターである研究者らがある程度は聞き役に回ったとしても、互いの発見による刺激を受け、互いの姿勢からも影響されていた。それらは、自らの臨床的なスタイルを問おうして、結果的に自己との対話を始めていたのではないかと考えられた。「きく」ことと「はなす」ことを重ねた経験は参加者にはとても新鮮に映ったようである。聞いているときに発言せずに見ているだけでもよいという気軽さとその場にいられる安心感をもたらしたと思われる。その結果、お互いの感情、考えをより深く考えるようになった。そのことを通して、「はなす」ことの広がりゆとりは会話を継続していけるという見通しにつながった。家族の立場を経験した参加者の間には、これまでの家族観とは違う見方と看護師である自分との新たな関係性に気づいていた。

2) アクション・リサーチによって得られた教育プログラム

ケアの見直しと「はなすこと」の心地よさを取り入れる

問題解決や、その場をおさめるような一方的な介入を見直すことの必要性に全体が気づいたことはリフレクティング・プロセスを研修プログラムとする目的としては効果的であった。話し合いのグループにおいて、話し手と聞き手を分けるということで、お互いが安心して聞くことに集中できるようになった体験も看護師としての経験上はなかなかないことであり、大きな気づきとなった。臨床的にはまだまだ話し合いの議題、テーマ、獲得目標など無意識にある方向に結論を誘導するようなことから解放されるには絶えまぬ訓練が必要なのは言うまでもないが、月に一回のペースでも自己の意思でリフレクティング・プロセスを実践し続けたことで心に感じたことを自然に話し出せることの心地よさと、その関係性を醸成するような雰囲気が生み出されることがいかに大切なのかを感じた参加者が多く見られた。そんなことが可能なのだ、と体験できた人がいたことはとても大きな意味を持つ。そのような安心して人にかかわる方法により対話の原理を見直すことができた。これは現在変化の途上にある看護師の現任教育のあり方に変化をもたらす示唆につながると考えられた。

患者家族と医療者間、看護師間で対話が可能になる安心感が得られる

精神科の臨床看護においては、自然な対話の継続はリフレクティング・プロセスを用いることで可能になる。日々のケアにおける対話実践が必要であるという認識が共有され、研究参加者が自らの看護に重ね合わせ、これからの看護に安心感がひろがった。患者に対して医療者が、一方的な介入をするのではなく、患者の思いや生活のしにくさを受け止めることが重要である。患者のニーズを見極めるためにも、患者の自由な発言に沿って患者を中心にしたチームをつくっていくことが治療の方向性として必要なのではないか。このような対話実践こそが安心できる対話の環境が保たれ、そのなかで患者も看護師も変わりゆくことが治療の有効性を高めることにつながると考えられた。

3) 今後の課題

これまでの教育や臨床経験の違い、職種や病院内の権威的階層的分断、改善の難しい固定的な役割分担によって関係性から自由になることはむずかしい。患者、家族からの発言の際のためらいや試行錯誤の繰り返しなどこれまで手付かずだった臨床の場での医療者と利用者の不均衡は今でも多くのところで続いている。

今回の研究で明らかになったように少なくともリフレクティング・プロセスが臨床でチーム医療の一部として活用され、そのための教育方法が整備されれば、自分たちのペースや価値観に巻き込まないようにすることだけにはできるのではないかと考えられる。まず、専門職同士の会話の場面においてリフレクティング・プロセスを活用し、多職種連携の会議などにおいても応用することで自分たちのやり方になじむリフレクティングのスタイルを探してみることができる。そのためにもリフレクティング・プロセスを活用し組織内の硬直した関係性や患者-医療者関係における権威的威圧的な対応を変化させる取り組みが今後も必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西池絵衣子, 未安民生
2. 発表標題 リフレクティング・プロセスの実践的な学び
3. 学会等名 第33回日本精神保健看護学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西池絵衣子, 未安民生
2. 発表標題 精神分野における地域包括ケアに従事する看護師の対話を重視した教育の方法と検証(第2報)
3. 学会等名 第33回日本精神保健看護学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 未安民生, 西池絵衣子
2. 発表標題 1日を振り返る
3. 学会等名 自己との対話と他者との会話 リフレクティングの理解と体験
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西池絵衣子, 未安民生
2. 発表標題 リフレクティング・プロセスの経験－レジリエンス教育の基本としての対話－
3. 学会等名 第44回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西池絵衣子
2. 発表標題 リフレクティングプロセス序説-対話を通じた共育、職種を超えて-
3. 学会等名 第30回 精神科看護管理研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西池絵衣子
2. 発表標題 精神分野における地域包括ケアに従事する看護師の対話を重視した教育の方法と検証 第1報
3. 学会等名 日本精神保健看護学会 第30回 学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	西池 絵衣子 (NISHIIKE EIKO) (90559527)	兵庫県立大学・看護学部・講師 (24506)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------